

5.

国際研究ネットワーク

2020 年度

国際研究ネットワーク構築概要

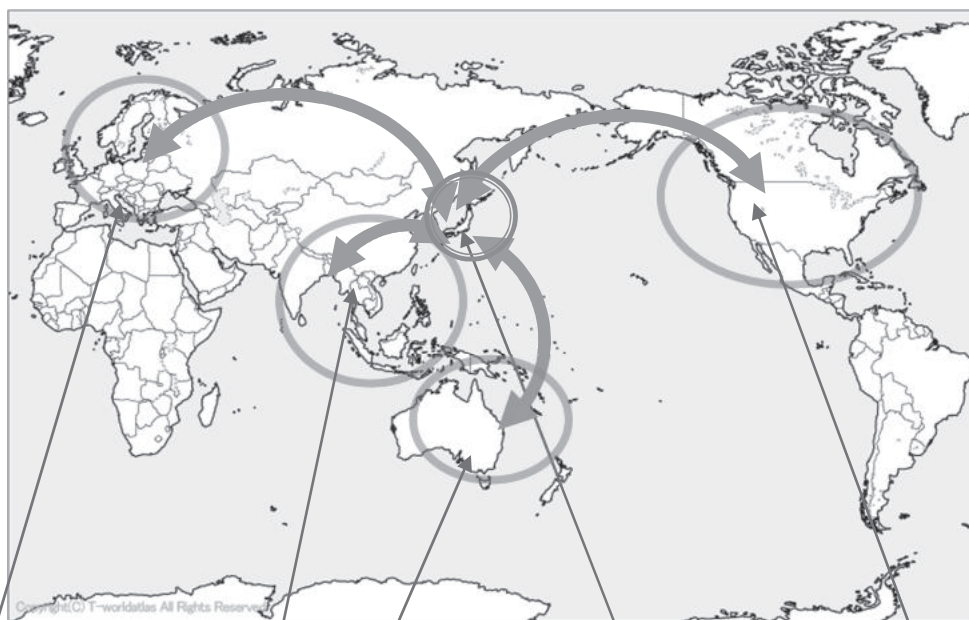
- 1) 海外研究交流
- 2) 国際共同研究プロジェクト
- 3) JAWS・AIT
- 4) INTPART プロジェクト
- 5) 国内外招聘研究者一覧

▶ 2020 年度国際研究ネットワーク構築概要

各国の研究機関・研究者との国際研究・交流ネットワーク

ジェンダー研究所は、国内・海外の研究機関及び研究者らと広くネットワークを構築してきた。2020 年度は新型コロナウイルス拡大の影響を受けたが、オンラインで国際シンポジウムを開催するなど国際交流や国際共同研究に積極的に取り組み、ヨーロッパ、アジア・オセアニア、北米地域の計 26 の教育研究機関の 30 名の研究者らとの研究交流があった。特にノルウェー科学技術大学 (NTNU) のジェンダー研究センターと IGS による INTPART プロジェクトでは、オンラインで国際共同シンポジウムを開催したほか、アンソロジープロジェクトでは NTNU および IGS の研究者が共同執筆をすすめた (本報告書 96 頁参照)。アジア工科大学院大学 (AIT) と IGS による国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」では、海外派遣はかなわなかったが、オンラインで国際シンポジウムが開催された (本報告書 48 頁参照)。

ジェンダー研究所を拠点とする国際ジェンダー研究ネットワークイメージ



ヨーロッパ

ノルウェー: ノルウェー科学技術大学 (NTNU) ジェンダー研究センター/クリスティアン・ミケルセン研究所/ベルゲン大学
オーストリア: ザルツブルク大学
フランス: パンテオン・アサス大学
イギリス: ロンドン大学/ロンドン大学クイーン・メアリー校

アジア・オセアニア

台湾: 国立台湾大学/台湾国立政治大学/台湾法律学院
韓国: 釜山大学/韓国ジェンダー政治研究所/ソウル大学日本研究所/ソウル大学国際問題研究所/National Museum of Korean Contemporary History
香港: 香港浸會大学社会科学院・文学院/嶺南大学
タイ: アジア工科大学院大学
インドネシア: インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター/サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学 インドネシア女性・ジェンダー・子供学会
オーストラリア: スウィンバーン工科大学/ラ・トロブ大学/Victorian Assisted Reproductive Treatment Authority /

日本

Women and Diversity in East asian political Representation (Wonder) (日韓台3カ国)/日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会/「East Asian International Relations Theory」研究会/国際移動とジェンダー研究会/経済理論学会分野別ジェンダー分科会/現代規範理論研究会/国立精神・神経医療研究センター臨床研究支援部研究プロジェクト「筋ジストロフィーの発症前・早期診断および早期治療における倫理的課題の検討」研究会/国際ジェンダー学会「開発とジェンダー」研究会

北米

米国: 日本—アメリカ女性政治学者シンポジウム (Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS) /ワシントンカレッジ/アメリカン大学/ブリッジポート大学/ポモナカレッジ/ハワイ大学
カナダ: ラバル大学

1) 海外研究交流

■ジェンダー研究所所属の研究者が 2020 年度に研究交流または共同研究をした海外の研究者

＜アジア・オセアニア＞

黄長玲 (Chang-Ling Huang) (国立台湾大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施、論文の執筆。(本報告書 18 頁参照)

楊婉瑩 (Wan-Ying Yang) (台湾国立政治大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

「東アジアにおける政治とジェンダー」研究プロジェクトの研究協力者。韓国ジェンダー政治研究所との共同研究の台湾国会議員アンケート調査を実施、論文の執筆。(本報告書 18 頁参照)

Ah-ran Hwang (釜山大学教授)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆。

Jinock Lee (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆。

Soo-hyun Kwon (韓国ジェンダー政治研究所研究委員)

【担当】申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

韓国研究財団一般共同研究「議会内政治的代表的性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」研究プロジェクトの共同研究を実施。研究成果発表・論文の執筆。

共著論文 “It’s Money that Matters in the End: The Impact of Gender-targeted Public Funding on Political Parties and Women Candidates in South Korea.” 執筆、*International Political Science Review* の特集に投稿

Chia-Ling Wu (国立台湾大学教授)

【担当】仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

2020 年 7 月 16 日に IGS 国際オンラインセミナー「ケアのインフラストラクチャーとしての臨床データ報告：生殖補助技術 (ART) の臨床結果登録に対するフェミニストアプローチ」に招聘し、“Data Reporting as Care Infrastructure: Feminist Approaches to ART Registries”と題した報告の後、臨床データをより良い ART ケアに転換するために、何が重要か、日本・台湾・韓国の研究者も参加して討論した。(本報告書 51 頁参照)

Ani Soetjipto (インドネシア大学准教授)、Avyanthi Azis (インドネシア大学講師)

【担当】平野恵子 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

共同研究を行っているインドネシア大学政治社会学部国際関係研究ユニットのメンバー。Soetjipto 氏、Azis 氏が主宰する研究会「政治的ディアスポラ——アジア地域におけるインドネシア人移住労働者保護へ向けて」第 2 回研究会において、インドネシア人移住家事労働者に関する研究報告をおこなった (オンライン形式、2021 年 2 月 10 日)。

Deborah Dempsey (スウィンバーン工科大学准教授)

【担当】仙波由加里 (特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

2020 年 9 月 9 日に IGS 国際オンラインセミナーに招聘し、「Families of Strangers? Donor-linked Families in Victoria, Australia」と題した報告のあと、ドナーリンキングを取り巻く問題について、セミナー参加者とともに意見交換、討論した。また 2021 年 Cambridge University Press から出版予定の書籍 *Donor-linked families in the digital age: Relatedness and regulation* (Dempsey 准教授とラ・トロープ大学の Fiona Kelly 教授編著) の 1 章を執筆するために、情報交換を行っている。(本報告書 55 頁参照)

Fiona Kelly (ラ・トロープ大学教授)

【担当】仙波由加里 (特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

2021 年 Cambridge University Press から出版予定の書籍 *Donor-linked families in the digital age: Relatedness and regulation* (スウィンバーン工科大学の Deborah Dempsey 准教授と Kelly 教授編著) の 1 章を執筆するために、情報交換を行っている。

Kate Bourne (Victorian Assisted Reproductive Treatment Authority 不妊カウンセラー)

【担当】仙波由加里 (特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

仙波が日本の代表、Bourne 氏がオーストラリアの代表となり、共同研究を企画し、2020 年 9 月に日豪研究交流基金事業に Information Sharing within Donor-conceived Families in Japan and Australia という題目で応募した。交流基金に採択はされなかったが、Cambridge University Press から出版予定の書籍 *Donor-linked families in the digital age: Relatedness and regulation* (スウィンバーン工科大学の Deborah Dempsey 准教授と Kelly 教授編著) の執筆のために、情報交換を行っている。

June-Ok Ha (National Museum of Korean Contemporary History シニア学芸員)

【担当】仙波由加里 (特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

2020 年 7 月 16 日に IGS 国際オンラインセミナー「ケアのインフラストラクチャーとしての臨床データ報告：生殖補助技術 (ART) の臨床結果登録に対するフェミニストアプローチ」に韓国から特別参加してもらい、韓国の状況について説明していただき、臨床データをより良い ART ケアに転換するために何が重要かについて一緒に討論した。(本報告書 51 頁参照)

<ヨーロッパ>

Elizabeth Evans (ロンドン大学教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

Politics & Gender (アメリカ政治学会学会誌) の特集「Women's Party (女性政党)」の共同責任編集担当 (オンライン First View 2019 年発行)。紙媒体雑誌は 2020 年 3 月出版。

Rainbow Murray (ロンドン大学クイーン・メアリー校教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

Rainbow Murray, Vibeke Wang, Ragnhild Louise Muriaas 教授らが *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019 年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を行なっている。

Vibeke Wang (クリスティアン・ミケルセン研究所シニア・リサーチャー)

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2013 年以来研究交流。特に *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019 年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を深めている。

Ragnhild Louise Muriaas (ベルゲン大学教授)

【担当】 申琪榮 (IGS 教授)

【共同研究・研究交流の概要】

2013 年以来研究交流。特に *International Political Science Review* の特集「Gender and Financial Cost of Elected Office Worldwide」を共同企画したことをきっかけに、2019 年からワークショップや論文執筆の過程で研究交流を深めている。

Anne Brunon-Ernst (パンテオン・アサス大学教授)

【担当】 板井広明 (IGS 特任講師)

【共同研究・研究交流の概要】

オーストラリアにおけるベンサムのパノプティコン構想をめぐる、不定期のオンライン会議や、2021 年 3 月 31 日に開かれた 5th EAIHN Online Seminar「Trans-Pacific Perspective on the British Empire」で意見交換をおこなった。

Guro Korsners Kristensen (ノルウェー科学技術大学教授)

【担当】 仙波由加里 (IGS 特任リサーチフェロー)

【共同研究・研究交流の概要】

2019 年度から始動しているノルウェー科学技術大学と IGS の二国間共同研究 (INTPART プロジェクト) の一環として、Kristensen 氏とは日本とノルウェーのファミリープランニングと出生率に関連する比較研究をすすめている。研究の成果として、二国間共同研究の成果物となる書籍 *Same but Different? Comparative Perspectives on Gender Equality and Diversity in Japan and Norway* (2021 年 Routledge より出版される予定) に所収される論文、Chapter 12 「Public Discourses on Fertility and Family Planning in Japan and Norway」を共同執筆中。(本報告書 26 頁および 96～98 頁参照)

<ヨーロッパ>

Merete Lie（ノルウェー科学技術大学教授）

【担当】仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

【共同研究・研究交流の概要】

2019 年度から始動しているノルウェー科学技術大学と IGS の二国間共同研究（INTPART プロジェクト）の一環として、Lie 氏とは日本とノルウェーの生殖医療とジェンダーに関連する比較研究をすすめている。研究の成果として、二国間共同研究の成果物となる書籍 *Same but Different? Comparative Perspectives on Gender Equality and Diversity in Japan and Norway* (2021 年 Routledge より出版される予定) に所収される論文、Chapter 13 “Assisted Reproduction in Donated Eggs/Sperm in Norway and Japan—The Development of the Norwegian and Japanese Regulation of Assisted Reproduction”を共同執筆中。（本報告書 28 頁および 96～98 頁参照）

<北米>

Linda Hasunuma（ブリッジポート大学助教授）

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

英文学術雑誌 *Journal of Women, Politics and Policy* (2019) に共著論文“#MeToo in Japan and South Korea : #WeToo, #WithYou,”執筆。本論文が 2020 年 1 月 Routledge 社から出版。2019 年度 JAWS（ボストン）の共同ファシリテーター。（本報告書 90～93 頁参照）

Melissa Deckman（ワシントンカレッジ教授）

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

第 10 回 JAWS（日本開催、オンライン）にてパネリスト担当。（本報告書 90～93 頁参照）。

Kimberly Cowell-Meyers（アメリカン大学助教授）

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Politics & Gender（アメリカ政治学会学会誌）の特集「Women's Party（女性政党）」の共同責任編集担当（オンライン First View 2019 年発行）。紙媒体雑誌は 2020 年 3 月出版。

Angelina Chin（ポモナカレッジ准教授）

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Chin 准教授のポモナカレッジにおける授業の一環として行われたセミナー“Feminisms and Gender in East Asia”のゲストスピーカーとして招聘され、中国における日本軍戦時性暴力問題をめぐる越境的市民運動についてオンラインでレクチャーを行った（11 月 10 日）。

Maura Stephens-Chu（ハワイ大学講師）

【担当】仙波由加里（特任リサーチフェロー）

【共同研究・研究交流の概要】

2020 年 11 月 21 日に IGS 国際オンラインセミナー「月経教育と女性の生涯の健康」に講師として招聘し、「生理の習い方と話し方が生理異常の治療の決定にも影響する？日本の女子大生へのインタビューから」と題した報告のあと、日本における月経教育をとりまく社会的・文化的背景なども合わせて、何が問題かや月経教育の重要性について討論した。（本報告書 62 頁参照）

■ジェンダー研究所所属の研究者が研究交流・共同研究をしている海外の研究機関

韓国ジェンダー政治研究所

韓国ジェンダー政治研究所は 1999 年に設立された NPO。政治分野におけるジェンダーギャップを解消するために世論喚起、研究、ロビー活動を行っている当該分野で代表的な民間研究所。

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

当研究所理事を務める。2016 年～2018 年に韓国研究財団から助成金を受託し、共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。

ソウル大学日本研究所

日本研究の活性化と日韓相互理解の増進を目標として 2004 年に設立。日本関連資料の収集、国際学術会議、学術活動事業、情報ネットワーク構築、次世代日本専門家の養成等の事業を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

学術雑誌『日本批評』海外編集委員、ならびに、共同研究プロジェクト『思想と文学』共同研究員を務める。

ソウル大学国際問題研究所

ソウル大学政治外交学部設立され、外交問題や国際政治の研究に取り組む研究所。研究活動の一部として Social Science Korea「East Asian International Relations Theory」を遂行。

【担当】申琪榮（IGS 教授）

【共同研究・研究交流の概要】

Social Science Korea「East Asian International Relations Theory」共同研究員。東アジアの国際関係理論におけるフェミニスト国際政治、日本研究を担当。研究グループで共著『主権と比較地域秩序』を出版（韓国語、2020 年）

香港浸會大学社会科学院・文学院

2017 年度より社会科学院と文学院の連携において Gender Studies Concentration（性別研究専修課程）を設立し、ジェンダー研究分野における教育体制を構築している。

【担当】大橋史恵（IGS 准教授）

【共同研究・研究交流の概要】

担当教員が社会科学院・文学院の共同プログラムであるジェンダー研究専修課程の所属教員らとのあいだで研究交流を実施している。

アジア工科大学院大学（AIT）環境資源開発研究科「ジェンダーと開発」専攻

1959 年創立で 60 以上の地域から 1700 人以上の学生が学んでいる理工系を中心とした全寮制の大学。学内公用語は英語で、当該専攻はジェンダー視点から開発の問題を研究している。

【担当】日下部京子（AIT 教授）、申琪榮（IGS 教授）、板井広明（IGS 特任講師）

【共同研究・研究交流の概要】

本学ジェンダー社会科学専攻院生の AIT 派遣、AIT 院生の日本でのフィールドワーク受入による交換研修プログラム「AIT ワークショップ」（本報告書 94～95 頁参照）は、新型コロナウイルス感染症拡大のため今年度は実施できなかったが、20 年におよぶワークショップ開催をめぐって、2021 年 2 月 1 日に国際シンポジウムを AIT と共同で開催した（本報告書 48 頁参照）。

インドネシア大学戦略的国際研究大学院ジェンダー研究センター

インドネシア国内で初めて女性学・ジェンダー研究に関する大学院を設置。研究者のみならず、政府関係者（中央、地方）、社会運動家、起業家等、多くの人材を輩出している。本研究センターは、大学院所属ジェンダー研究を専門とする教員より構成される。

【担当】平野恵子（IGS 特任リサーチフェロー）Ani Widyani Soetjipto（インドネシア大学教員、センター員）

【共同研究・研究交流の概要】

2008 年以降、定期的に研究交流を実施している。2020 年度は、Kristi Poerwandari 氏（インドネシア大学教員）との共同研究「日本、インドネシアにおける母・成人娘間の愛着、コンフリクト、ジェンダー構築」を推進し、比較調査を行った。

また、2021 年 2 月に実施した IGS セミナー “Organizing Domestic Workers in Indonesia” にセンター員である Ani Widyani Soetjipto 氏を招聘し、公開セミナーを実施した（本報告書 68 頁参照）。加えて、「東アジアにおけるジェンダーと政治」ブックレットシリーズ no.3, IGS Project Series No.19 として前年度セミナー「Gender and Politics in Indonesia after 2019 Election」の成果を翻訳し、刊行した（本報告書 112 頁参照）。

サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学 インドネシア女性・ジェンダー・子供学会

インドネシア女性・ジェンダー・子供学会は、サティヤ・ワチャナ・キリスト教大学に事務局を置く、ジェンダー、セクシュアリティ、フェミニズム研究を専門とする研究者、実践者が集う学会である。2018 年に英語による学術雑誌『インドネシア女性・ジェンダー・子供学会誌（*Salasika*）』を創刊し、上記分野の査読論文、書評を掲載している。

【担当】平野恵子（IGS 特任リサーチフェロー）

【共同研究・研究交流の概要】

当学会が刊行する学術雑誌 *Salasika* の海外査読者を務める。 <http://salasika.org/index.php/SJ/reviewers>

ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

ノルウェー最大の大学 NTNU に属する、1989 年設立の研究センター。人間関係や文化とジェンダーの関連性およびそれらの変容に着眼した、学際的なジェンダー研究に取り組んでいる。ノルウェー国内のジェンダー研究の中心拠点でもあり、国際的なネットワーク構築も積極的に進めている。

【担当】石井クンツ昌子（IGS 客員研究員）、戸谷陽子（IGS 所長）、小玉亮子（IGS 研究員）、仙波由加里・吉原公美（IGS 特任 RF）、佐野潤子（IGS 研究協力員）ほか

【共同研究・研究交流の概要】

2017 年 4 月の NTNU 研究者本学来訪及び国際シンポジウム登壇を起点に研究交流始動。ノルウェーリサーチカウンスルの国際共同研究助成金 INTPART による共同プロジェクト（2019～2021 年度）では、共同研究、研究者および大学院生の相互派遣、国際シンポジウム・セミナー・ワークショップ開催などの事業を展開している。（本報告書 96～98 頁参照）。

【国内外関連研究会】

- 政治代表におけるジェンダーと多様性研究会（Women and Diversity in East asian political Representation (Wonder)）
〈コーディネーター〉申琪榮（IGS 教授）
〈メンバー〉三浦まり（上智大学教授）、Jackie Steele（名古屋大学特任准教授）
- 日本政治学会「ジェンダーと政治」研究会（申）
- 「East Asian International Relations Theory」研究会（申）
- 国際移動とジェンダー研究会（大橋・平野）
- 経済理論学会分野別ジェンダー分科会（大橋・板井）
- 現代規範理論研究会（板井）
- 国立精神・神経医療研究センター臨床研究支援部研究プロジェクト「筋ジストロフィーの発症前・早期診断および早期治療における倫理的課題の検討」研究会（仙波）
- 国際ジェンダー学会「開発とジェンダー」研究会（平野）
- 国内の女性学・ジェンダー研究センターとのネットワーク
ジェンダー関連学協会コンソーシアムへの参加 ほか

2) 国際共同研究プロジェクト

ジェンダー研究所所属メンバーは、各国の研究者たちと国際共同研究プロジェクトを推進している。

プロジェクトタイトル	
東アジアにおけるジェンダーと政治	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
【研究分担者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所
三浦まり	上智大学
Jackie Steele	名古屋大学
Chang-ling Huang	国立台湾大学
Wan-ying Yang	台湾政治大学
研究プロジェクト概要	
東アジア地域はその経済発展の成果により国際的に注目されているが、政治の民主化の道筋は一律ではない。本研究プロジェクトでは、日本、韓国、台湾の民主主義の有り様と政治代表性の関係について、ジェンダー視点に立脚した国際共同研究により比較分析する。議員を対象としたアンケート調査、政党、議員、市民社会関係者へのインタビューや現地でのフィールドワークを実施するほか、定期的な国際シンポジウムや研究集会を開き、研究交流を促進する。東アジア地域において、政治代表性の男性優位性が続くメカニズムを明らかにし、政治制度におけるジェンダー公平性・多様性を実現させる政策も検討する。2019年度も成果をまとめ国内外で成果発表を行った。日本の国会議員を対象とする2度目のアンケート調査も実施した。2020年は論文執筆のための研究会を実施したほか、投稿先を検討した。（本報告書 18 頁参照）	

プロジェクトタイトル	
議会内政治的代表性の性差に関する公式・非公式的制度要因分析 韓国・日本・台湾比較分析	
メンバー	メンバー所属研究機関
【研究代表者】 Ah-ran Hwang	韓国釜山大学
【研究分担者】 申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Jinock Lee	韓国ジェンダー政治研究所
Soo-hyun Kwon	韓国ジェンダー政治研究所
研究プロジェクト概要	
2016 年度から韓国研究財団から助成金を受託し共同研究を実施。研究課題は「議会内政治的代表性の性差に関する公式、非公式的制度要因分析：韓国・日本・台湾比較分析」。ジェンダー研究所の「東アジアにおけるジェンダーと政治」研究プロジェクト（本報告書 18 頁参照）の韓国調査を実施。2019 年度は、成果をまとめつつ国内外で成果発表に力を入れた。2020 年度も引き続き英語論文の執筆に専念した。	

プロジェクトタイトル

Politics & Gender Critical Perspectives 「#MeToo in East Asia」

メンバー

メンバー所属研究機関

【共同責任編集者】

申琪榮	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
Chang-Ling Huang	国立台湾大学
Mari Miura	上智大学
Ruby Y.S. Lai	嶺南大学
Chao-ju Chen	台湾法律学院
Jing Xiong	活動家

研究プロジェクト概要

Politics & Gender（アメリカ政治学会学会誌）の Critical Perspectives セッションに「#MeToo in East Asia」特集を企画し、台湾、香港、中国の研究者らと日本を含む東アジア 5 カ国における #MeToo 運動に関する事例研究を紹介（2021 年 9 月発行予定）。

プロジェクトタイトル

Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED)

メンバー

メンバー所属研究機関

【研究代表者】石井クンツ昌子

お茶の水女子大学ジェンダー研究所／立教大学

Guro Kristensen

ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

【研究分担者】

戸谷陽子	お茶の水女子大学ジェンダー研究所／基幹研究院人文科学系
小玉亮子	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系／ジェンダー研究所
仙波由加里	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
吉原公美	お茶の水女子大学ジェンダー研究所
佐野潤子	慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター
松田デレク	お茶の水女子大学国際教育センター
Priscilla Ringrose	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
Siri Øyslebø Sørensen	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター
Jennifer Branlat	ノルウェー科学技術大学（NTNU）ジェンダー研究センター

研究プロジェクト概要

ノルウェーリサーチカウンシルの国際共同研究助成金（INTPART）による、2019～2021 年度の 3 年間に渡る国際共同プロジェクト。お茶の水女子大学ジェンダー研究所とノルウェー科学技術大学ジェンダー研究センターの所属員が参加。家族、教育とジェンダー、生殖医療などの領域で、ノルウェーと日本の国際比較研究に取り組むほか、互いの大学に滞在しての在外研修や、修士・博士院生の共同指導、ワークショップ・セミナーの開催といった活動を進める。共同研究の成果を Routledge 社から刊行予定。（本報告書 96～98 頁参照）

3) JAWS・AIT

ジェンダー研究所は、次世代ジェンダー研究者を養成するための持続的な国際研究交流ネットワークの形成にも取り組んできた。その代表的な活動が「日本—アメリカ女性政治学者シンポジウム」(Japan-America Women Political Scientists Symposium, JAWS) と「AIT ワークショップ」である。

JAWS は、政治学分野でジェンダー研究を遂行する日米の女性研究者らが、日本とアメリカで交互に集まって研究交流を行うユニークな研究ネットワークである。参加者は、互いの研究交流はもちろん、若手研究者に参加を促して国際的な視点を身につけてもらおうと共に、政治学分野でマイノリティーである若手女性研究者にメンタリングを行う。ジェンダー研究所は JAWS の活動拠点として、日本が開催地となる際は、研究集会・国際シンポジウムを主催し、成果発信にも努めている。

AIT ワークショップはお茶大の大学院前期課程「ジェンダー社会科学専攻」の院生と、タイのアジア工科大学院大学「ジェンダーと開発」専攻の院生達が、タイと日本でフィールドワークを実施しながら学び合う教育プログラムである。ジェンダー研究所は本プログラムを立ち上げた主体でもあり、現在まで派遣および受け入れの運営主体として若手研究者の国際交流に努めている。

▶ JAWS

■概要と歴史変遷

JAWS の歴史は 2000 年の夏に遡る。2000 年にアメリカン大学 (American University) のカレン・オコナー (Karen O'Connor) 教授が、同大学に「女性と政治研究所」(The Women and Politics Institute) を開設したことを記念して「女性と政治に関する比較政治学」ワークショップを主催したことがその始まりである。このワークショップに、アメリカ政治学会と日米友好基金 (The Japan-US Friendship Commission) の支援を得て日本から 5 名の研究者が招かれ、同じく招かれた 7 名のアメリカの研究者らと 3 日間にわたって研究交流が行われた。

当時、日本の政治学の分野では、女性政治学者がとりわけ少数であったのみならず、ジェンダー視点に基づいた研究は、政治学研究としてほとんど関心を持たれていなかった。これがさらに若手女性研究者を遠ざけ、「女性と政治」分野の研究が進まない原因となっていた。そんな中で始まったアメリカの研究者との交流は、日本の研究者にとって国際的な研究動向に触れることに加え、日本で女性研究者が政治学を研究するときにぶつかる様々な壁について議論する場も提供した。女性研究者の地位向上や女性研究者が行っている研究への評価という問題は、アメリカの女性研究者らにとっても共通の課題であった。

JAWS を始めたアメリカの女性研究者、M・マーガレット・コンウェイ (M. Margaret Conway)、カレン・オコナー、マリアン・パリー (Marian Palley) は、そのような女性研究者の課題に取り組んできた「女性と政治」研究のパイオニアであった。彼女らは同分野の女性研究者を励ましてサポートするだけでなく、自ら質の高い論文を政治学ジャーナルに発表することで、「女性と政治」研究を正統性のある政治学の研究として位置付けることに貢献したのである。JAWS を通じての交流により、日本の研究者とアメリカの若手研究者たちはアメリカの第一世代女性研究者らの経験を共有し、大きな励ましを得ることができた。例えば、2000 年の第 1 回 JAWS ワークショップの参加者たちは、後にアメリカ政治学会の実行委員長 Rob Hauck の協力を得て学会誌『PS: Political Science & Politics』の 2001 年 6 月号に論

文を掲載した。この掲載をきっかけに JAWS の日本参加者らは日本の政治学会でも注目されることになり、彼女らの研究も認められるようになったと回顧する。岩本美砂子（三重大学）、大海篤子（お茶の水女子大学）は福岡市で開催された 2006 年世界政治学会（IPSA）の準備委員も務めた。

このように JAWS は日本の研究者たちに、アメリカの女性研究者との交流による研究やキャリアの発展、アメリカ政治学会での研究発表、長期にわたってのメンタリングの機会を与えてくれた。アメリカの研究者にとっても、日本で研究発表を行う機会、日本の女性研究者とのネットワーク形成、若手研究者のキャリア開発へと繋がった。歴代の JAWS に参加した日米の女性研究者らは、互いの社会の相違点を認識しつつ、それぞれの場で女性研究者が直面する課題に取り組み、国際的な視点で研究を進めていく貴重な経験を得たのである。

JAWS は 2000 年から現在に至るまで、日米友好基金等の支援を得て 9 回研究集会を実施した。その概要を簡単に以下に振り返る。

第 2 回：マリアン・パリー教授（デラウェア大学,University of Delaware）が 2001 年サンフランシスコで開かれたアメリカ政治学会で「Women in Japan and the US」をテーマに企画し、12 名が参加した。

第 3 回：2002 年に日本で開催。アメリカから 3 名が参加した。三重大学、お茶の水女子大学のジェンダー研究センターで研究集会を開催した他、女性議員、地方議員、アクティビスト達に面会した。

第 4 回：2003 年、デラウェア大学とアメリカ政治学会（フィラデルフィア市）で開催され、新たに若手研究者が日本から 3 名、アメリカから 2 名加わった。この時の成果として、2004 年 1 月号の『PS: Political Science & Politics』に論文要約が掲載された。論文全文はアメリカ政治学会ウェブサイトの Special E-Symposium で公開された。

第 5 回：2007 年にジュリー・ドーラン（Julie Dolan）准教授（マカレスター・カレッジ,Macalester College）とアメリカ政治学会（APSA）の Bahram Rajaee の企画によって開かれた。APSA（シカゴ市）では「女性と外交」を題したパネルを構成した他、マカレスター・カレッジ（ミネソタ州セントポール市）で研究集会が開かれた。14 名の日米女性研究者が参加した。

第 6 回：2009 年、再び日本で開かれアメリカから 6 名の研究者が来日した。アメリカ大統領選挙に挑んだヒラリー・クリントンとサラ・ペイリンに関する研究、アメリカの少数政党における女性の役割、下院議員のスピーチ分析、医療政策と女性など最新の研究を報告した。日本の参加者も女性と地方議会、投票行動、女性議員のリクルートメント、女性国会議員に関する研究を発表した。お茶の水女子大学のジェンダー研究センターはドイツ日本研究所（German Institute for Japanese Studies）と共に東京の研究集

会を主催した。アメリカの研究者らは東京都世田谷区の生活者ネットワークを訪問、さらに富山県で行われた母親大会でも研究発表し好評を得た。

第 7 回：2010 年に、メリッサ・デックマン（Melissa Deckman）准教授（ワシントン・カレッジ,Washington College）と APSA の Bahram Rajaee の企画によってアメリカで開催された。参加者は「Gender, Politics and Policy: Post-Elections」をテーマにワシ



第 8 回 JAWS（2017 年）、お茶の水女子大学での研究交流会

ントン・カレッジ（メリーランド州）とアメリカ政治学会（Washington DC）で研究報告を行った。2010年のJAWSは日米から19名が参加し、それまでで最大規模となった。

第8回：時をおいて2017年に日本で再開された（しばらく開催されなかったのは資金上の問題と第一世代の高齢化による）。JAWSの再開を兼ねてジェンダー研究所がアメリカからジュリー・ドーランとメリッサ・デックマン（マリアン・パリー教授も来日予定だったが、悪天候により断念した）を招聘し、国際シンポジウム「なぜアメリカで女性大統領は誕生しなかったのか？」を開催した。130名を超える多くの聴衆が集まり大盛況だった。このほか、東京都議会訪問や、JAWSの新旧メンバー、ジェンダー研究所の研究者、お茶大の院生らとの研究交流も行った。この時の成果は2018年刊行の『ジェンダー研究』21号の特集「Gender and Political Leadership」に掲載された。

アメリカ政治学会におけるJAWS HP→<https://connect.apsanet.org/jaws/>



第8回JAWS（2017年）、東京都議会訪問

■JAWS 2018 年度成果

2018年 JAWS（第9回） 「ジェンダーと民主主義」 “Gender and Democracy”

（8月28日～31日、マサチューセッツ州、ボストン）

2018年、第9回JAWSがアメリカ政治学会の協力を得てボストンで4日間開催された。ボストン市にあるサフォーク大学のローゼンバーグ東アジア研究所は、研究集会の場所とレセプションを提供してくれた。今年から第一世代のJAWSメンバーは引退した形となり、申琪榮（ジェンダー研究所）、メリッサ・デックマンが引き続きファシリテーターとして参加した以外は、全員新しいメンバーが参加した。

今回はリンダ・ハスヌマ（Linda Hasunuma）（ブリッジポート大学, University of Bridgeport）と三浦まり（上智大学）が加わり、アメリカ政治学会の国際交流担当のAndrew Stinsonの協力も得て、アメリカ政治学会と日本政治学会から、若手女性研究者に参加を呼びかけた。最終的に日米からそれぞれ若手研究者を6名ずつ、計12名を選抜した。

テーマは「ジェンダーと民主主義」（Gender and Democracy）として、4名のファシリテーターが初日にレクチャーをすることで始まった。12名の参加者は研究セッションとアメリカ政治学会パネルで、女性運動、女性の政治参画、トランスナショナルな女性連帯、リーダーシップ、政治参加のジェンダーギャップなどについて研究発表を行った。そのほか、キャリア形成、メディアと研究発信、論文の出版などについて議論するセッションも設けた。女性の政治参加に関する大規模な研究を支援している「Barbara Lee Foundation」も訪問し財団の活動についてうかがった。（具体的なスケジュールは

<https://mk0apsaconnectbvy6p6.kinstacdn.com/wp-content/uploads/sites/22/2019/02/2018-JAWS-detailed-schedule.pdf>）

■JAWS 2019 年度成果

JAWS 2018年の参加者らがアメリカ政治学会で発表した論文をさらに発展させ、アメリカ政治学会の学術雑誌「PS」に投稿した。その内4名が採択され掲載予定である。また、JAWS 2020年（日本）に向けて、アメリカ政治学会のコーディネーターと協力して資金申請に取り組んだ。

■JAWS 2020 年度成果

2020 年度は日本で開催される予定だったが、資金申請がうまく進まなかったのと、新型コロナウイルス（COVID-19）のパンデミックによって移動が制限され、日本政治学会で JAWS のパネルを組んでオンライン発表（9 月 26 日土曜日 13:15~15:15）を行った。参加者と発表論文のタイトルは下記のとおりである。

2020 日本政治学会 JAWS パネル：Intersectional Perspectives of Crisis Politics

1. Melissa Deckman, Washington College （メリッサ・デックマン、ワシントン・カレッジ）

Gender, Age, and Intersectionality in the 2020 Presidential Race

2. 浅野幸子、減災と男女共同参画 研修推進センター・早稲田大学

Impact of COVID-19 on Japanese society: From Gender & Minority Perspective

3. 西田奈保子、福島大学

Gender issues in rebuilding the lives of disaster victims: surveys on post-disaster public housing areas in Fukushima prefecture

Chair

申琪榮、お茶の水女子大学 IGS

Discussants

武田宏子、名古屋大学

本山央子、お茶の水女子大学

▶ AIT

■国際教育交流プログラム「AIT ワークショップ」概要

開発とジェンダーの問題を海外で実践的に研究するプログラム

20 年目を迎える国際教育交流プログラム

AIT ワークショップは、ジェンダー研究所と、タイのアジア工科大学院大学（Asian Institute of Technology (AIT)）とにより実施されている、国際教育交流プログラムである。

2001 年に、ジェンダー研究センター（現ジェンダー研究所）所属教員と、AIT「ジェンダーと開発」専攻の日下部京子教授らの尽力によって始められ、2004 年には、本学と AIT との間で大学間学術交流協定が結ばれた。以降、協定に基づき、タイ AIT で実施されるワークショップへの本学博士前期課程院生を主とする派遣と、AIT 大学院生の日本国内での研修受入による、大学院生を主体とした研究交流事業をほぼ毎年実施している。

2012 年度からは、AIT ワークショップ・プログラムは、ジェンダー研究センターが従来提供してきた大学院博士前期課程科目「国際社会ジェンダー論演習」として単位認定が始まった。2013 年度はサマープログラムを活用して AIT 院生の日本国内研修を実施し、2014 年度からは大学院博士前期課程科目「フィールドワーク方法論」を国内事前研修として取り入れた。

グローバルなフィールドでの理論的検討と実践的学習

本教育プログラム（「国際社会ジェンダー論演習」）の目的は、開発とジェンダーにかかわるグローバルな課題群の分析方法や視座、海外におけるフィールド調査の基礎を、実践的に学習することにある。

大学院講義の事前学習（関連機関での調査）、調査して得た知見の英語によるプレゼンテーション、報告書作成という一連の調査研究の研修を通して、修士論文作成のための技能を習得する。加えて、英語によるインタビュー、プレゼンテーション、論文執筆の訓練機会にもなる。

このような充実したプログラムを通して、参加者は開発の問題をジェンダー視点から考察することの意義を皮膚感覚と理論的観点からより深く把握することができるようになる。また AIT に集まるアジア各国の院生の熱意ある議論スタイルや問題関心の多様さから刺激を受け、研究手法や語学のブラッシュアップへの動機づけを得る。その結果、研究者としての議論の組み立て方や調査方法、研究アプローチについて際立った効果が参加者には見られるのであり、本プログラムは比類のない教育効果をもっていると言える。

■2020 年度「AIT ワークショップ」について

新型コロナウイルス感染症拡大のため今年度の実施は見送られたが、AIT ワークショップをめぐる国際シンポジウムを 2021 年 2 月 1 日に AIT と共同でオンライン開催した。司会を平野恵子（IGS RF）がつとめ、ワークショップ統括の板井広明（IGS 特任講師）と日下部京子（AIT 教授）がその概略を、ワークショップ参加者の大類由貴（ユネスコ・アジア文化センター）とソン・チャンフイ（AIT 院生）がその経験を発表した。大崎麻子（Gender Action Platform 理事）による SDGs と開発をめぐる講演が続き、高松香奈（ICU 准教授）と大橋史恵（IGS 准教授）のコメントの後、申瑛榮（IGS 教授）が締めくくった。（本報告書 48 頁参照）

■AIT ワークショップ過年度実績

実施年度	研修テーマ
2001	Gender and Development ジェンダーと開発
2002	Gender, Work and Globalization ジェンダー、労働、グローバリゼーション
2003	Women, Globalization and Home-based Work 女性、グローバリゼーション、在宅労働
2004	Female Migrant Workers' Rights in Thailand タイにおける女性移動労働者の権利 【協定締結】
2005	Gender and Development in Thailand: Labor rights and violence against women タイにおけるジェンダーと開発：労働者の権利と女性に対する暴力
2006	〔実施せず〕
2007	Gender, Rights and Empowerment ジェンダー、権利、エンパワメント
2008	Thailand-Japan Interactive Research Actions by Using Gender Perspectives ジェンダー視点によるタイ・日本相互研究
2009	Gender and Policy: Through Thailand-Japan Interactive Analysis ジェンダーと政策：タイと日本の相互分析を通して
2010	Gender and Social Change: Comparative Analysis of Thailand and Japan ジェンダーと社会改革：タイと日本の比較分析
2011	Gender and Disaster ジェンダーと災害〔特別プログラム：本学でのシンポジウム開催〕
2012	Sexuality セクシュアリティ
2013	Global Justice, Women's Health and Prostitution グローバル・ジャスティス：女性の健康と売春
2014	1) Sexuality, 2) Gender and Poverty, 3) Education and Empowerment 1) セクシュアリティ、2) ジェンダーと貧困、3) 教育とエンパワメント
2015	Labor, Sexuality and Empowerment 労働、セクシュアリティ、エンパワメント
2016	Labor and Association from Gender Perspective ジェンダー・パースペクティブから見た労働と組織
2017	Sexual minority and migrant workers from gender perspectives ジェンダー視点から見たセクシュアル・マイノリティと移住労働者
2018	Power and Sexuality from Gender perspectives ジェンダー・パースペクティブから見た権力とセクシュアリティ
2019	Gender and Empowerment in Urban Space 都市空間におけるジェンダーとエンパワメント

4) INTPART プロジェクト

国際的比較研究とその最新成果を研究教育に応用する国際共同事業

■概要

ノルウェーリサーチカウンスルの国際共同研究助成金 International Partnerships for Excellent Education, Research and Innovation (INTPART) による、Norway-Japan: Bridging Research and Education in Gender Equality and Diversity (NJ_BREGED) プロジェクト。ノルウェー科学技術大学 (NTNU) のジェンダー研究センターと IGS とで、2019～2021 年度の3年間にわたって、教員・研究者・院生の相互派遣および、ノルウェーと日本のジェンダー平等、ダイバーシティについての比較研究、研究教育、セミナーやワークショップの開催などを進め、共同研究の成果を書籍として刊行する。

■プロジェクト構成（相互に連携する6つのワークパッケージ (WP)）

WP1 プロジェクト管理：NTNU とお茶大の代表が高水準の生産性と創造性を担保。

WP2 在外研修：両大学の院生、教員、研究者がパートナー大学に滞在して教育交流や在外研究を行う。

WP3 院生共同指導：両大学の教員が、大学院生の研究プロジェクトの共同指導を行う。

WP4 合同カリキュラム開発と交換教育：質の高い研究に基づく国際的な教育プログラムを開発。

WP5 共同出版と年次ワークショップの開催：アンソロジー刊行プロジェクト

WP6 広報・成果普及とセミナー開催：公開イベントの開催などプロジェクト成果の発信

■2020 年度プロジェクトメンバー

《NTNU》

グロ・クリステンセン（教授：プロジェクトマネージャー）

ジェニファー・ブロンラ（ポストドク研究員：プロジェクトコーディネーター）

プリシラ・リングローズ（教授）

シリ・エイスレボ・ソレンセン（ジェンダー研究センター長・教授）

《IGS》

石井クンツ昌子（IGS 客員研究員／名誉教授／立教大学特任教授：本学側代表）

戸谷陽子（IGS 所長／基幹研究院人文科学系教授）

小玉亮子（IGS 研究員／基幹研究院人間科学系教授）

仙波由加里（IGS 特任リサーチフェロー）

吉原公美（IGS 特任リサーチフェロー：事務局）

松田デレク（国際教育センター講師）

佐野潤子 (IGS 研究協力員／慶應義塾大学ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター特任講師)

■2020 年度事業内容

新型コロナウイルス感染症流行の影響を受けての、大学閉鎖、出入国制限は、研究者と大学院生の相互派遣に重きをおく本プロジェクトにも多大な影響をおよぼした。パンデミックが長期化する中、計画していた事業のうち、国際シンポジウム・ワークショップ、インタビュー調査など、可能なものは実施形態をオンラインに変更し、状況に則した国際的な研究交流の方法を積極的に導入した。

①オンライン国際シンポジウム「平等国家ノルウェーの「サクセスストーリー」」の開催

当初は4月のNTNU研究者の来日時に実施予定であったイベントプログラムを変更し、11月にオンラインで日本とノルウェーを繋いでの国際シンポジウムを開催した。[本報告書 45 頁参照]

【開催日時】 2020 年 11 月 30 日（月）17:00~18:30（日本時間）9:00~10:30（ノルウェー時間）

【開催形式】 Zoom Webinar

【基調講演】 プリシラ・リングローズ

【ディスカッサント】 戸谷陽子、松田デレク

【パネリスト】 グロ・クリステンセン、シリ・エイスレボ・ソレンセン

【司会】 仙波由加里

【開会挨拶】 インガ・M・W・ニーハマル（駐日ノルウェー大使）

【開会挨拶】 佐々木泰子（お茶の水女子大学理事・副学長、グローバル女性リーダー育成研究機構長）

【閉会挨拶】 石井クンツ昌子

②書籍刊行プロジェクト

ウェブ会議システムを活用して、インタビュー調査、ワークショップ、エディターミーティングを実施し、予定されていたスケジュールを大きく変更することなく、国際比較研究のアンソロジー出版に向けた作業が進められた。

a) 国際比較研究調査

前年度末に各研究者が作成したアブストラクトに基づき、執筆章ごとの共同研究チームが編成されて研究調査が開始された。国際・国内ともに人的移動をすることが困難になったため、インタビュー調査や研究会議にはウェブ会議システムなどを活用するなどし、グローバルなパンデミックという状況に対応しつつ研究調査活動が進められた。

b) ワークショップ

第1回 10月19日：Q&A セッション

初めて執筆者全員が顔を合わせる機会となったこのセッションでは、各章の執筆者からは研究調査と執筆の進捗情報についての報告があり、エディターたちからは、出版企画書への出版社からの講評についての報告があった。それに続く質疑応答も含め、セッション全体を通じて、アンソロジーの編集方針と以降のスケジュール情報が共有された。

第2回 12月15日：第1稿合評会

第1稿の提出後に開催されたこのセッションは、執筆者を3グループに分け、互いの論文を読んで講評を述べあう合評会。エディターからの講評も含め、1本1本の論文に対して丁寧なコメントが出された。

c) エディターミーティング

石井クンツ昌子、プリシラ・リングローズ、グロ・クリステンセンの3名のエディターは、全体で16章、執筆者21名となるアンソロジー刊行プロジェクトのリーダーである。エディターたちは頻繁にウェブ会議を開催し、編集方針、スケジュール、目次構成の決定、Routledge社との交渉をすすめる、出版契約を締結するに至った。また、ワークショップの運営や各章の論文の査読も担当している。

③プロジェクトウェブサイト <https://intpart-igs.info/>の公開

2020年8月にプロジェクトの新設ウェブサイトを開示した。本プロジェクトの開始に至る経緯から最新情報まで、日本語と英語で情報発信する。



プロジェクトウェブサイトトップページ

④大学院生の在外研修

本学、NTNUともに、2020年度の在外研修に参加する大学院生の選考は2019年度中に完了しており、年度初頭から、それぞれ渡航に向けた準備を進めていた。しかし、新型コロナウイルス感染症の国際的な流行の影響により、年度内の在外研修は実現できなかった。本学の参加予定者については、要件を満たす限り、2021年度のプログラム参加も可能としている。

⑤プロジェクト会議の実施

本学のINTPARTメンバーが出席する月例ミーティングならびにNTNUのメンバーとのミーティングをウェブ会議形式で実施した。

■2020年度事業成果

国際移動が制限されたこともあり、アンソロジー刊行プロジェクトに力を注ぐ1年となったが、そのための調査協力や共同研究グループ内での研究会議などで、研究者同士のコミュニケーションが活発に行われたことは大きな成果である。また、全員参加のワークショップの実施や、メーリングリストによる効率的かつ積極的な情報共有など、エディターたちのリーダーシップにより、書籍出版にむけた執筆者全員の結束が図られた。結果として、日本とノルウェー間の行き来ができなくなるという状況下でも、実質的な交流の深化が実現できたと考えている。執筆者たちはこうした活動の成果を糧に、各々の論文の議論を充実させ、完成させる作業に取り組んでいる。

オンライン開催した国際シンポジウムは、ノルウェーのジェンダー平等の状況について学びつつ、日本の現状を再考するプログラムであった。国内外から100名を超える参加者があり、ウェビナー形式でのイベント開催による国際的な対話の発展の可能性を実感する機会にもなった。

国際的な教育・研究交流のすべてが、インターネット利用で代替できるわけではなく、特に、参加者の決定していた大学院生の相互派遣プログラムが実施できなかったのは残念である。状況が改善するまで延期という形で準備態勢をとりつつ、一日も早く国際移動が再開される日が来ることを願っている。

2021年度は本INTPARTプロジェクトにとって最終年度になるが、これまでに積み重ねてきた実績をさらに発展、充実させて、将来につながる成果とする所存である。

5) 国内外招聘研究者一覧

■ 2020 年度 海外からの招聘研究者

【アジア・オセアニア】

日下部京子（アジア工科大学院大学・タイ）

国際シンポジウム「開発・教育・ジェンダー」（48 頁参照）

ソン・チャンフイ（アジア工科大学院大学・タイ）

国際シンポジウム「開発・教育・ジェンダー」（48 頁参照）

呉嘉苓（国立台湾大学・台湾）

IGS セミナー「Data Reporting as Care Infrastructure」（51 頁参照）

デボラ・デンプシー（スウィンバーン工科大学・オーストラリア）

IGS セミナー「Family Building by Donor Conception and Donor-linking」（55 頁参照）

アニ・ウィダヤニ・スチプト（インドネシア大学・インドネシア）

IGS セミナー「インドネシアで家事労働者を組織化すること」（68 頁参照）

【ヨーロッパ】

プリシラ・リングローズ（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）

INTPART プロジェクト（96～98 頁参照）

国際シンポジウム「The Egalitarian Norway」（45 頁参照）

グロ・コースニス・クリステンセン（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）

INTPART プロジェクト（96～98 頁参照）

国際シンポジウム「The Egalitarian Norway」（45 頁参照）

シリ・エイスレボ・ソレンセン（ノルウェー科学技術大学・ノルウェー）

INTPART プロジェクト（96～98 頁参照）

国際シンポジウム「The Egalitarian Norway」（45 頁参照）

篠崎香子（ザルツブルク大学・オーストリア）

IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

【北米】

マウラ・スティーブンス・チュ（ハワイ大学・米）

IGS セミナー「月経教育と女性の生涯の健康」（62 頁参照）

巢内尚子（ラバル大学・カナダ）

IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

■ 2020 年度 国内招聘研究者

大崎麻子（関西学院大学ほか）国際シンポジウム「開発・教育・ジェンダー」（48 頁参照）

高松香奈（国際基督教大学）国際シンポジウム「開発・教育・ジェンダー」（48 頁参照）

柘植あづみ（明治学院大学）IGS セミナー「Data Reporting as Care Infrastructure」（51 頁参照）

飯尾真貴子（一橋大学）IGS セミナー「米国移民管理レジーム下でのトランスナショナルな社会空間の再編」（53 頁参照）

大野聖良（日本学術振興会特別研究員 RPD）IGS セミナー「米国移民管理レジーム下でのトランスナショナルな社会空間の再編」（53 頁参照）

片山亜紀（獨協大学）IGS セミナー「ヴァージニア・ウルフのフェミニズム」（57 頁参照）

伊田久美子（大阪府立大学）IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

伊藤るり（津田塾大学）IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

定松文（恵泉女学園大学）IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

小ヶ谷千穂（フェリス学院大学）IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

中力えり（和光大学）IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

宮崎理枝（大月短期大学）IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

小井土彰宏（一橋大学）IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

森千香子（同志社大学）IGS セミナー「『家事労働の国際社会学』を読む」（59 頁参照）

森明子（湘南鎌倉医療大学）IGS セミナー「月経教育と女性の生涯の健康」（62 頁参照）

後藤浩子（法政大学）IGS セミナー「ブリテンにおけるフランス革命論争」（66 頁参照）

梅垣千尋（青山学院女子短期大学）IGS セミナー「ブリテンにおけるフランス革命論争」（66 頁参照）

立川 潔（成城大学）IGS セミナー「ブリテンにおけるフランス革命論争」（66 頁参照）

犬塚 元（法政大学）IGS セミナー「ブリテンにおけるフランス革命論争」（66 頁参照）

リチャ・オーリ（千葉大学）IGS セミナー「Gender Matters : Being a Foreign Academic in Japan」（70 頁参照）